



平成25年11月号

発行:旭川医科大学病院卒後臨床研修センター

センターの活動予定等

- ◆12月18日 症例発表会
- ◆12月中旬 CPC
- ◆12月下旬 卒後臨床研修センター一通信12月号発行



【報告】研修医セミナーを開催しました

11月12日(火)「“Difficult Airway”を学ぶその前に～短い研修期間を有効活用するためのTips～(講師:救命救急センター鈴木先生)」、11月19日(火)「ステロイドの使用の基礎知識(講師:救命救急センター松坂先生)」を開催しました。



研修医体験談 第14回 清原 聡子 先生

私は内科スタートで、最初の3ヶ月を神経内科で研修しました。日々新たに学ぶことばかりで、頭がパンクしそうになりながら向学心が刺激され、どんどん興味を持つようになりました。神経内科の特徴的な手技である髄液検査も、回数を重ねるうちにすっかり好きになりました。ただ、月3～4回の当直だけは毎日が緊張で、なかなか慣れることができませんでした。次の3ヶ月は救急科でした。ここでは主に感染症と外傷の勉強をしました。当直以外に、週に何回か日中の救急車当番をすることになるため、救急科研修が終わる頃には当直に対する恐怖心が幾らか解消されたように思います。その次は、現在研修中の皮膚科です。特に炎症性疾患に興味があり、炎症グループに所属しその診断や治療にのめり込んでいます。また、機会があれば積極的に皮膚生検や手術に参加するようにしています。若手向けの任意参加の勉強会も、難しいですが面白いです。休みの日にはトレッキングや乗馬に行ったり、映画鑑賞やカラオケでリフレッシュしています。研修は決して楽しいことばかりではありませんが、辛いだけでもありません。すでに1年目の半分以上が過ぎてしまいましたが、残りの研修も精一杯取り組んでいきたいと思っております。



【おしらせ】卒後臨床研修プログラム説明会を開催します

平成26年1月22日(水)に卒後臨床研修プログラム説明会を予定しています。詳細が決まりましたら改めてご案内いたしますので多くの学生のご参加をお待ちしています。

母校の紹介 第17回 産科婦人科学講座

産婦人科は「ゆりかごから墓場まで」の言葉通り女性の一生をサポートする診療科です。講座は産科、婦人科腫瘍、不妊症の3つの専門分野から成り、道北・道東地区の高度医療を担っています。産科グループでは様々な疾患を合併したハイリスク妊婦の妊娠・分娩管理や胎児の異常を疑われて来院される方の精密検査、出生前診断を担当しています。また他院で対応困難な母体救命救急にも力を入れており、いずれも大学病院としてのメリットを生かし、他科との協力のもと診療にあたっています。また、本学医学科・看護学科の他に、道立旭川高等看護学院や北海道医学技術専門学校などでも産科関連の講義を行い、周産期の魅力を伝えるべく教育活動にも取り組んでいます。婦人科腫瘍グループは今では婦人科良性腫瘍に対する一般的な治療として確立された腹腔鏡下手術を国内の黎明期から導入しており、より低侵襲な手術を目指して改良を重ねています。特に早期子宮体癌に対する腹腔鏡下手術は高度先進医療に認定され、その成績は全国的にも高い評価を得ております。その他更年期や思春期の専門外来を開設し、多様なニーズに対する専門的医療を提供しています。不妊症グループでは難治性不妊患者の治療、体外受精、顕微授精、凍結受精卵移植をはじめ、各種腹腔鏡下手術、開腹手術によって今までに数多くの挙児希望患者に最先端の医療を提供してきました。晩婚化の影響から不妊治療の需要は年々増加してきており北海道における不妊治療のセンター的役割が期待されています。研究面においては受精機構、無精子症の解明に重点を置いており、今までに数多くの論文を発表してきました。国内外の他施設との交流も盛んで国外研究留学も可能です。



産婦人科は労働環境が過酷といったイメージがあるかもしれませんが、日本産婦人科学会を挙げての取り組みの甲斐もあって待遇は著しく改善してきています。また医局内は非常に明るく自由に意見を述べ合える雰囲気があります。学生実習では伝えきれなかった産婦人科の魅力をぜひ実際の診療と一緒に行うことで感じていただきたいと考えています。

【お問い合わせ先】 旭川医科大学病院 卒後臨床研修センター

〒078-8510 北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1-1

TEL:0166-68-2198 FAX:0166-68-2199

E-mail: sotsugo@jimu.asahikawa-med.ac.jp

http://www.jimu.asahikawa-med.ac.jp/shomu/sotsugo/

※ホームページもご覧ください